

室君

季は	地は	ワキ
春	播磨	明神の神職
		狂言 神職の下人
		ツレ 室君
		シテ (謡なし) 明神の神靈

「是は播州室の明神に仕へ申す神職の者にて候。さても天下泰平の折節なれば。室君たちを船に載せ。囃物をして神前にまるる御神事の候。いま此時もめでたき御代なれば。急ぎ御神事を執りおこなはゞやと存じ候。いかに誰かある。

狂言 「御前に候。」

ワキ詞 「いそぎ室君たちに神前へ御参りあれと申し候へ。」

狂言 「畏つて候。」

ツレ 「室の海。」

地 「室の海。波ものどけき春の夜の。月の御舟に棹として。霞む空は面白やな。霞む空は面白や。」

ツレ 「梅が香の。」

地 「梅が香の。磯山遠く匂ふ夜は。出船も心ひく。」

花ぞ綱手なりける。此花ぞ綱手なりける。

ワキ詞 「近頃めでたき御事にて候。又ことぐく棹を御さし候ふほどに。棹の歌を御うたひ候へ。」

ツレ 「棹の歌。うたふ浮世の一節を。

地 「うたふ浮世の一節を。夕波千鳥こゑそへて。友よ
びかはす海士乙女。恨みぞまさる室君の。行く船
や慕ふらん。朝妻船とやらんは。それは近江の海
なれや。我も尋ね尋ねて。恋しき人に近江の。海
山も隔たるや。あぢきなや浮舟の。棹の歌をうた
はん。水馴棹の歌うたはん。

クセ 「裁ち縫はぬ。衣着し人もなき物を。何山姫の布さ

らすらん。佐保の山風のどかにて。日影も匂ふ天
地の。開けしもさしおろす。棹のしたゞりなると
かや。

ツレ 「然れば春すぎ夏たけて。

地 「秋すでに暮れ行くや。時雨の雲のかさなりて。峰
白妙に降りつもる。越路の雪の深さをも。知るや
しるしの棹たてゝ。豊年月の行末を。はかるも棹
の歌。歌ひていざや遊ばん。

「いかに申し候。かゝるめでたき折節に。そと御神樂を参らせられ候へ。

ツレ詞 「さらば御神樂を参らせうずるにて候。こゝとても。

室山かげの神垣の。

地 「加茂の宮居はありがたや。 (神樂)

ツレ 「月影の。

地 「月かげの。更けゆくまゝに風をさまれば。不思議や異香薰じつゝ。和光の垂迹。韋提希夫人の。姿

をあらはしおはします。 (中の舞)

地 「玉のかんざし羅綾のたもと。く。風にたなびく

瑞雲に乗じ。所は室の海なれや。山はのぼりて。

上求菩提の機をすすめ。海は下りて。下化衆生の相をあらはし。五濁の水は。実相無漏の大海となつて。花ふり異香くんじつゝ。相好まことに肝にめいじ。感涙袖をうるほせば。はや明けゆくや春の夜の。はや明方の雲にのりて。虚空にあがらせ

給
ひけり。[。]

底本：国立国会図書館デジタルコレクション
『謡曲評釈 第四輯』 大和田建樹 著